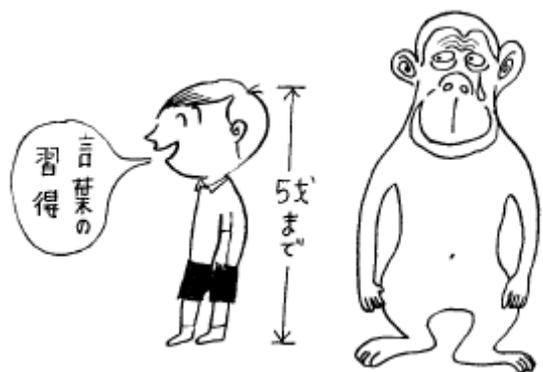


鉄は熱いうちに打たなければならない

チンパンジーやオランウータンを、どんなに教育してみても、言葉を習得させることだけはできない、ということです。彼等は人類に次ぐ高等動物であり、言葉以外の物事では、かなりの学習能力のあることを示しています。しかし、言葉だけは習得できないのです。

つまり、“言葉の習得”は、人類の脳だけがもつ能力であり、人類は、この能力をもっていたために、経験を次代に伝えることができ、知恵を蓄積することができて、他の動物に卓越した文化を享受することができるようになったわけです。

“言葉の習得”こそ、人類だけに許された切り札的な能力ですが、この力も五歳ころまでに学習しなせんと、言葉を受け入れ、言葉を使いこなす能力を失ってしまうことが、先のカマラの例、ポール・ショシャルの報告、その他今までの多くの調査研究で明らかにされました。



言葉の習得は人類だけに許された切り札的な能力

それは、ちょうど、赤熱した鉄は、伸ばすことも曲げることも実に容易にできますが、その時期を過ぎてしまったら最後、どんなにたたいてみてもどうにもならないのによく似ています。

幼児期は、言葉を習得するための、まさに“鉄の赤熱した時期”に当たっています。この時期をはずしますと、もう後では取り返しがつかないのです。しかも、問題なのは、人間の人間としての能力は、すべて、“言葉を習得”したところから育ち始める、ということです。

複雑な思想はもちろんのこと、喜びや悲しみといった感情でさえ、“言葉を習得”しない間は育たないのです。カマラの観察記録によれば、人語を解しなかった数年間は、喜びも悲しみも決して表現しなかった、と伝えていきます。

六、七年たって、会話がかわせるようになって初めて、喜びや悲しみを表現するようになり、さらに、恥じらいさえ表現するようになったと報告されています。